

地域の宝物活用プロジェクト…発見！新しい子どもの居場所づくり…

食料環境科3年 安部 尋、安部善映、石崎柚希、佐藤風馬、淀野海翔

食料環境科2年 泉谷海佑、大塚珠奈、菅野琴美、齋藤舞華、佐藤 唯、情野雪音、
竹内絵理奈、沼 心乃

I. 学習の動機

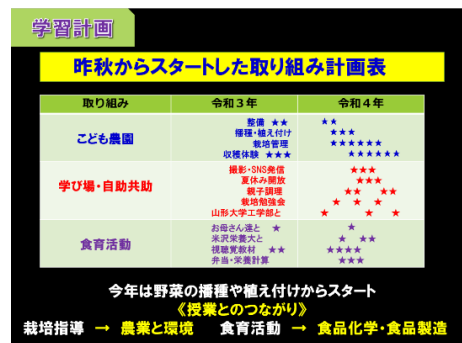
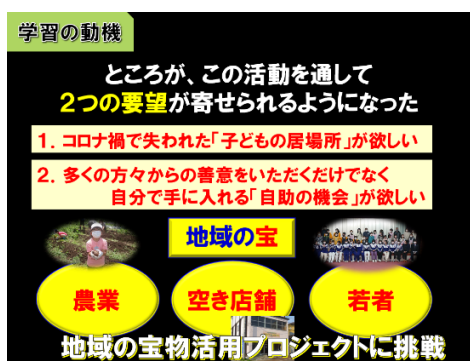
コロナ禍による経済ショックや、ロシアのウクライナ侵攻による穀物や原油の高騰が、多くの家庭を直撃しています。その中でもひとり親家庭では 48.2%もの子供たちが困難に直面していることが、厚生労働省のデータで分かります。また、川西町の統計では、ひとり親世帯数は 134 世帯、世帯員数は 560 人にも及び、人口の 4%近くになっています。私たちの先輩は、暮らしが苦しく、その影響が食生活まで及んでいる親子に、少しでも楽しい食事や豊かな栄養を提供しようと考え、子ども食堂を開始しました。約 2 年間に及んだこの活動は、36 回に及び、延べ 1400 食ものテイクアウト弁当や手作りパンを提供することができました。

ところが、この活動を通して2つの要望が寄せられるようになったのです。1つ目は、コロナ禍によって失われた「子どもの居場所が欲しい」という声です。そして2つ目は、多くの方々からの善意をいただくだけでなく、自分で手に入れる自助の機会が欲しい、という声でした。

そこで私たちは、自分たちが学ぶ農業や、まちなかにあふれる空き店舗、そして高校生のような若者を地域の宝ととらえ、その力を結集する「地域の宝物活用プロジェクト」に挑戦することにしました。

II. 学習目標

1. こども農園を活用した居場所づくりに取り組み、自助と共助を学ぶ。
 2. 空き店舗を活用した居場所づくりと食育活動を広める
 3. 高大連携など若者の力結集を進め居場所の充実を図る
- の3点として、子どもの居場所づくりと食育を進めます。



Ⅲ.学習計画

この学習を進めるため3つの取り組みを計画しました。1つは、校内の農場をこども農園として整備し、子ども達や親子の居場所として活用する取り組み。2つ目は、こども農園をいつでも来園できる学びの場に提供しながら、自助や共助を学べる居場所にする取り組み。3つ目は、まちなかの空き店舗も居場所に活用し、大学生と協力し合いながら食育の輪を広める取り組みです。

昨年秋からスタートしたこの取り組みは、この図（前ページ最後）のように計画を立て、今年は野菜の播種や植え付けからスタートしました。また、子どもたちへの栽培指導は、農業と環境の学習を活かし、その収穫物を活用した食育活動は、食品化学や食品製造の学習を活用しました。



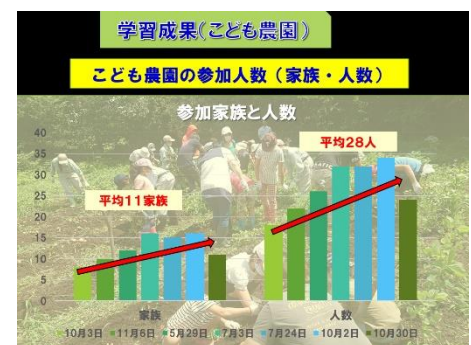
Ⅳ.学習成果

こども農園は、秋の収穫体験から今年まで7回実施しました。特に今年度は、春先の播種や植え付けからスタートし、ナスやピーマン、キュウリやトマトなどを初めて植え付けた子どもたちは興味を抱いてくれました。お父さんやお母さん方も、野菜作りが初めての方が多く、植え付け方法やこれからの栽培に対する質問をたくさん受けました。また、7月3日には、中間管理の日を設け、ジャガイモやサツマイモの草むしりや土寄せを行い、大きく育ち始めたナスやピーマンの誘引も親子には好評でした。

さらに、川西町の伝統野菜でもある紅大豆について説明しながら、プランターにも植え付けを行い、自宅で栽培しながら観察日記をつけてもらいました。

7月24日と10月2日には夏野菜やジャガイモ、そしてサツマイモやサトイモなどの収穫体験を開催し、子ども達は大喜び。10月30日には秋野菜の収穫体験も実施して、自分たちが植え付けた野菜類が実を付ける喜びと、達成感に笑顔が満ち溢れました。

こども農園の参加人数です。家族数は平均11、参加人数は平均28人で、今年度になって増加しています。こども農園の参加親子にアンケート調査を実施したところ、次の結果が得られました。まず、こども農園が「とても楽しかった」は78%で、「楽しかった」を加えると100%の親子に喜んでもらえたことがわかりました。



次に、こども農園の開催を「もっと増やしてほしいか」、の質問には、92%の親子が「増やしてほしい」と答えてくれました。

私たちは、「増やして欲しい」という要望に応えるため、新しい取り組みを開始しました。それは、タブレット端末で撮影したこども農園の生育状況をSNSで発信し、情報提供する取り組みです。各家庭の畑を、ナス、ピーマン、トマトごとに撮影して、映像を提供しました。すると、「家族や兄弟で、お邪魔しても良いか」という問い合わせが増え、ある家族は週に3回も来園すると共に、週に1回のペースで訪れる家族も増えました。夏休み期間中の来園回数は、延べ85回に達し、親子ふれあいの場や学びの場として大好評でした。

自助と共助の学びでは、夏野菜やジャガイモ掘りなど、収穫の場面を活用して、取り組みを深めました。これまで実施してきた子ども食堂では、「他人からいただくこと」が当たり前になってしまいます。私たちは「こども農園は、土を利用して自分の行動と汗で、食べ物を手にできる。」と伝えながら、野菜を栽培する楽しさや、収穫した食材のおいしさを学び合いました。早速、送られてきた調理野菜の映像には「家族で一緒に調理ができた」や「大変美味しかった」という声が寄せられました。また、自宅で紅大豆やトマトを栽培する勉強会も開催し、自助の取り組みが深まりました。

空き店舗を活用した居場所づくりは、野菜の好き嫌いをなくそうという紙芝居や、地元の伝統料理を伝える人形劇を制作して、子どもたちの前で演じました。この視聴覚教材は、米沢栄養大学教授の安部貴洋先生や学生のみなさんとのオンライン交流でご指導を得ると共に、東北芸術工科大学教授の渡部泰山先生のアドバイスを受け山形県自作視聴覚教材コンクールに応募しました。

高大連携では栄養大と一緒に食育教室や九里学園高校と連携した居場所づくりを開催し、野菜料理のレシピ紹介や食育紙芝居の上演などを通して、子どもたちに食育の大切さを伝えています。また、夏野菜の収穫後には、自分たちで野菜弁当を試作。紅大豆ごはん、じゃがいもコロケ、夏野菜の素揚げなどを取り入れた弁当は、子どもたちに好評で、栄養大学にご指導をいただいた栄養計算でも、773キロカ



ロリー、たんぱく質 30gなどの数字が得られ、ビタミン含有も含め、子どもたちに伝えることができました。さらに、山形大学工学部教授の佐藤慎也先生および34名もの大学生が居場所づくりを視察。先日は居場所の改善策をご指導いただき、こども農園へのあそび場併設も考案し、密にならないウィズコロナの居場所づくりを大学生と一緒に設計中です。

V.学習のまとめと考察

1. 校内圃場を利用したこども農園を7回開催し、栽培体験や収穫体験を行い、延べ224人が参加。また、SNSを通した情報発信で、夏休みの来園者が85回、延べ206人も訪れ、合計430人の親子が居場所として活用。密を回避できる新しい居場所としてこども農園の有効性が証明できました。

2. こども農園を活かした自助の学びでは、栽培や収穫を通して「食べ物を自分で手に入れる」体験や、私たちが農業高校で学んだ栽培・収穫・調理の喜びや自助の考え方を伝えることができ、こども農園や空き店舗を活用した食育に大きな成果が生まれました。

3. 米沢栄養大学や山形大学工学部、さらに九里学園高校との子どもの居場所づくりの取り組みが、若者の力を結集した居場所づくりや食育活動として広まりました。

さらに、ボランティアスピリット・アワード2022では、農業、空き店舗、若者という地域の宝物を活用した全国的にも珍しい居場所づくりがコミュニティ賞を受賞し、高い評価を得ることができました。



VI.今後の課題と活動写真

今後は、高大連携の居場所設計とその実現に取り組みながら、高校生と大学生が共創する視聴覚教材の制作や農作物を活用したメニュー作りに取り組みながら、子どもの居場所づくりをさらに進めます。





《7月のじゃがいも掘り》



《7月の夏野菜収穫》



《10月のサツマイモ掘り》



《10月の秋野菜の収穫》



《3年生のメンバー(2年時)》



《2年生のメンバー》



《11月の屋内居場所づくり(食育)》



《10月の屋外居場所づくり(こども農園)》



《7月の夏野菜お弁当づくり》



《12月の山形大学工学部訪問》



《河北新報(左)や山形新聞(右)に掲載された子ども食堂の記事》



《米沢栄養大学との連携、右写真はオンライン交流》

VII. 感想と講評

3年 安部 専

私は昨年度から 2 年間、子ども食堂やこども農園、そして居場所づくりと続く課題研究に取り組んできました。この研究は、先輩達に取り組み始め、ただ先輩についていくだけで 1 年が過ぎました。それが、先輩達の頑張りや東北大会出場が決まると、私たちに発表の役割が移り、活動に拍車がかかりました。春先からのこども農園の準備や管理、紙

芝居の製作や子ども食堂の運営等、課題研究と部活と進路というトリプルターゲットの達成は大変でした。しかし、子どもたちや社会のために役立っているという充足感は、何より代えがたい達成感も生まれました。本当にとても楽しく、充実した学習でした。

3年 安部善映

この課題研究は先輩も含め女子が多く、男子の役割がわからない時間が過ぎました。しかし、こども農園の準備になると、堆肥散布や畦作りなどでパワーを発揮し、じゃがいもやサツマイモ堀り等でも、力作業を中心に役割が発揮できたと思います。また、農園や居場所イベントでの子どもたちとの触れ合いも、楽しく充実した活動になりました。コロナ感染症やウクライナ紛争、円安などで起きている社会不安や経済困窮の解消に、少しでも役立つ公益活動ができた事に、達成感や成就感を感じています。

3年 石崎柚希

私は、子ども食堂や居場所づくりの課題研究に2年間取り組んできました。最初は先輩についていくだけで精一杯でしたが、今年度はリーダーとして先頭に立って活動を進めました。特に、東北大会までは、進学に向けた学習と並行した準備や発表練習で、過重な負担感も感じました。また、大会での発表も緊張の連続で、結果も全国大会に出場できず悔しさも感じました。しかし、参加した子ども達はもちろん、お母さん方から感謝の言葉をたくさんいただき、充実感と将来の夢を手にししました。本当にありがとうございました。

3年 佐藤風馬

子ども食堂やこども農園、そして居場所づくりに取り組んできた私は、社会貢献活動の楽しさや難しさを学ぶことができました。特に、3年生になって取り組んだこども農園では、自助や共助という言葉の理解や活動の方法を学ぶことができ、公益学の分野に進学する私にとって、とても役に立ち将来に活かせる学習になりました。私たちのメンバーは、生徒会や農業クラブの役員が多く、進学や就職に向けた学習も大変な仲間が多かったのです。しかし、支え合い励まし合いながら取り組んだ課題研究に、誇りを感じます。

3年 淀野海翔

こども農園や居場所づくりでの私は、得意とする子どもの“面倒見の良さ”を発揮して活動に貢献できたと自負しています。小学生や年中、年少の幼児は、うれしくて楽しくて何をしてくすかわからないほど、はしゃぎまわります。また、指示や注意を守れず、「危ない」場面に直面することもあるのです。そんな子供たちを、導くことにやりがいを感じた課題研究でした。卒業後も、この活動に社会人として関わりたいと思っているので、いつでも呼んでください。2年間、ありがとうございました。

2年 泉谷海佑

私は、子ども食堂などに取り組み、その経験がとても役立ったと思います。特にお弁当やお菓子の提供、紙芝居の公演、畑作業の指導等、これまで体験したことがない活動だったので緊張しましたが、先輩や卒業生、子ども達やお母さん方などいろんな人と関わりを持つことができ、うれしく感じました。来年度は今年度以上に挑戦したいと思います。

2年 大塚珠奈

私は子ども食堂を通して、人と関わることに少し自信が持てるようになりました。これ

までの私は、人の目を見て話すのが苦手でしたが、子ども達が「お姉ちゃん」と呼んでくれる事に嬉しさを感じ、最近は目を見て話せるようになりました。また、江本班での活動は楽しかったです。将来は菓子製造業に就く夢を実現するため、来年度も頑張ります。

2年 菅野零美

課題研究で楽しかったことは、子ども食堂用のクッキー等を作ることでした。しかし、こども農園で親子に教えることは、私が理解していないことも多く難しく感じました。役に立ったのは、人見知りだった私が、こども農園で関りを持てるようになったことです。

2年 齋藤舞華

私は、この課題研究でコミュニケーション力が向上したと思います。特に子ども食堂やこども農園で、子どもたちと話すことが楽しく、とても役立ったと感じています。また、数多くのお菓子作りにも挑戦できて良かったと思います。3年生になったら、紅大豆を使ったお菓子作りや商品開発に挑戦したと思います。

2年 佐藤 唯

2年生での課題研究は、すべてが楽しく充実していました。特に、子ども食堂用のお菓子作りや夏野菜を使った弁当づくりは充実していました。来年度は、こども農園の野菜を使った商品作りや、販売活動にも挑んでみたいです。

2年 情野雪音

課題研究で取り組んだ「子ども食堂」や「こども農園」を通して、挨拶などに成長を感じ、メンバーと協力してお菓子やパン作りができた事に嬉しさを感じました。大変だったことはこども農園での活動で腰が痛くなったことですが、一生懸命に活動できました。来年度は、人形劇や紅大豆を使用したクッキーやコロッケなどにも、挑戦したいと思います。

2年 竹内絵理奈

課題研究で役立ったことはお菓子作りがスムーズにできるようになったことです。パン作りも美味しくものができて楽しかったです。大変だったのは子ども農園でした。将来は調理系に進みたいので、来年度は様々な調理や加工に挑みたいと思います。

2年 沼 心乃

私は1年間、課題研究に取り組んで、とても楽しかったと感じます。特に、お菓子作りは、みんなと協力していろんなものを作り楽しかったです。こども農園では、人見知りなところも少しずつ改善できて、成長できたかなと思います。来年も頑張ります。

《指導者講評》

実習講師 江本一男 「パワーの獲得と実践」

今年度の課題研究は、前半が子ども食堂や食育、後半はこども農園や居場所づくりに重点を置いた学習になりました。特に居場所づくりでは、農業高校生の得意分野である土から食材を生み出すことを「自助」と位置づけたこども農園や、紙芝居や紅大豆を教材としながら「共助」を学ぶ屋内の居場所づくりが特徴的だったと思います。そのような学習を通して、調理や加工力を身に付けたり、コミュニケーション力を獲得したり、将来の夢を明確にしてくれたメンバーが、たくさんいたことはとてもうれしいことです。想像力、行動力、創造力、公益力など、獲得した数多くのパワーを実践してください。